

## 野球バックの学校名の刺繍へのこだわり

私が東大和高校に着任した頃(35 年位前)、野球部員は黒の大きな遠征バックか、スパイクなどを入れる手さげのセカンドバックを持って登校していた。そのバックには、どちらも東大和という字が白で刺繍されていた。当時は、このバックをチームとして揃えているのが都立でも一流(?)チームの証のようだった。自転車通学者が多い東大和であったが、ある日、私は選手たちが皆、バックの「東大和」の文字が外側からちゃんと見えるように、自転車の前のカゴに乗せているのに気がついた。それは当時、「都立の星」と言われ周囲から認められているチームの一員であることの誇りであり、チームへの帰属感の強さの表現のように感じた。その後、府中工業高校に異動した時、選手の要望で肩掛けのセカンドバックを揃えたが、選手たちは「府中工業」の面を内側に向けて登校してくる者が多いような気がした。そもそも、このバックを持ちたがらない者もいた。この違いは何かということは容易に想像がつく。数年後、府中工業も部員が増え、新聞に「都立の強豪」などと書かれるようになった。そんな頃、駅で見知らぬ大人からこのバックを見て声をかけられた選手がいた。「府中工野球部か、最近強いんだってな。応援してるからな。頑張れ」。彼は翌日、みんなに嬉しそうにこの話をした。その後、バックの「府中工業」の面を表にして、堂々と歩く部員たちが増えた気がするのはいのせいだろうか。

片倉に異動して 2 年目に監督となって、その時の新一年生からバックのデザインを一新した。白の生地に紫の漢字で、大きく「片倉」と入れた。試合のユニホームの胸のマークと同じ字体にした。肩紐にもローマ字で「KATAKURA」と入れた。ともかく、片倉の字が目立つデザインになった。そして選手たちに「堂々とこのバックの片倉を表にして、八王子の街を歩け」と言った。以前、練習試合等で交流のある城東高校の選手が、白地に緑の大きな字で「城東」と書かれたバックを甲子園初出場後、なんとなく誇らしげに持っていたのが私の印象に残っていた。これを真似たわけだ。

そして、かつての東大和や当時の城東の選手たちと同じように、チームへの誇りを持って、このバックを肩にかけて欲しいと話した。

「今の片倉はまだ実力も実績もないので、そんな誇りを持ってないかもしれない。でも、そんな実力や実績を残してから誇りを持ってバックを持つのを待っていては遅い。なぜなら、私が歳をとってしまうからだ。だから、考え方を逆転してくれ。強くなって、甲子園に行ったことにしておこう。後から、それに合わせて強いチームになっていくというのも良いのではないか」。

このわけのわからない理屈を、選手は案外気にいってくれたらしく、堂々と胸を張ってバックを持ってくれるようになった。この翌年入学してきたのが、3 年次にベスト 4 になった選手たちである。

ところが数年後、部員の電車の中での行動に外部から苦情が来るようになった。字が目立つので、すぐに片倉の部員だとわかってしまう。何度か注意した後に、また苦情があった。私は次の年の新入部員から、バックの字を小さくして右下に移した。そしてチームの信頼が回復したら大きな字に戻すと宣言した。そんなことをしても、本質的な解決とは全く関係ないが、新入部員には、この字が小さくなった理由を毎年話している。最近は、苦情はなくなったが、これはこれで良いデザインの気がして元に戻さないでいた。でも、そろそろ戻そうとも思っている。昔の大きな片倉の文字に。